

総合資源エネルギー調査会
省エネルギー・新エネルギー分科会 省エネルギー小委員会
建築材料等判断基準ワーキンググループ（第12回）
議事要旨

1. 日時：令和3年11月30日（火曜日） 14時00分～17時00分

2. 場所：経済産業省別館1階 104会議室
（※オンライン開催）

3. 出席者：

委員

田辺座長、池本委員、井上委員、岩前委員、加藤委員、鈴木委員、
中村委員、二宮委員、前委員、望月委員、山下委員

オブザーバー

硝子繊維協会、ロックウール工業会、押出発泡ポリスチレン工業会、
ウレタンフォーム工業会、（一社）日本建材・住宅設備産業協会、
（一社）日本建設業連合会、（一社）住宅生産団体連合会、
（国研）新エネルギー・産業技術総合開発機構、
国土交通省住宅局、環境省地球環境局地球温暖化対策課脱炭素ライフスタイル推進室、
経済産業省製造産業局生活製品課

事務局

経済産業省資源エネルギー庁省エネルギー・新エネルギー部省エネルギー課

4. 議 題：

1 業界ヒアリング

5. 議事要旨：

議題1 業界ヒアリング

資料1について事務局から説明を行った後、①硝子繊維協会、②ロックウール工業会、③押出発泡ポリスチレン工業会、④ウレタンフォーム工業会の順にヒアリング資料の説明と質疑応答が行われた。

質疑応答においては、断熱材の性能指標を熱伝導率 λ とすべきか熱抵抗 R とすべきか等の論点について議論がなされた。（①③④の団体は λ を、②の団体は R を支持。）当該論点に関連する主な委員よりの指摘等は以下のとおり。

- ・ 住宅の断熱性能を高めるには、コストメリットの観点からまずは断熱材厚みを増すことが優先される。ただし、壁や天井の総厚みを一定の範囲に抑える観点から厚みを増すことには限度がある。住宅建築においては

厚い断熱材を用いて断熱性能を向上させることは既に充分に行っているため、断熱材の評価に用いる性能指標は熱伝導率 λ とすべきではないか。

- ・ ロックウールについて、これ以上の熱伝導率 λ の改善が難しいが故に熱抵抗値R値を性能指標とすることが望ましい、ということであると理解した。更なる熱伝導率 λ の改善には新たな製綿方法が必要とのことだが、新しい製綿方法には具体的にどの程度設備投資が必要なのか。
- ・ ロックウールについて、現行の製造技術の中でショットを少なくするなど改善を行っている中、新しい具体的な製綿方法がないのが現状である。
- ・ 建材トップランナー制度は中長期的な建材の性能向上に係る技術開発動向を見ながら目標を定めることが根幹にあると認識している。そのため、建材トップランナー制度でも住宅の省エネ基準と同様、性能指標を熱抵抗値R値とすることはダブルスタンダードになり、制度として無駄になりかねない。グラスウール、ロックウールとも熱伝導率 λ を性能指標とすることが良いのではないか。
- ・ 技術改善が限界に達しているかは要検討だが、設備ではトップの性能を維持し続けているものもあるため、性能指標を熱伝導率 λ として目標を定める方向で良いと思う。
- ・ 制度の目的は住宅・建築物の消費エネルギー削減だと思うが、建設時・輸送時・廃棄時の二酸化炭素排出を抑制するという観点に鑑みると、厚みでなく熱伝導率 λ を向上させるのが正しい方向性だと感じた。

以上

お問合せ先

資源エネルギー庁省エネルギー・新エネルギー部省エネルギー課

電話：03-3501-9726

FAX：03-3501-8396